

# 蘭茂本『韻略易通』考

浦 山 あゆみ

## 1. 蘭茂本のテキスト

明の蘭茂が著した『韻略易通』は、近代漢語の音韻史においてきわめて重要な韻書の一つである。近世音の声母体系を示す「早梅詩」はいうまでもなく、さらに雲南で編まれた本書が北方で何度か刊行されたことは、当時の官話分布を繙く手がかりともなろう。

そこで、本研究発表では『韻略易通』を研究するうえで必要な基本事項を確認するために、まず現存テキストを整理しておくこととした<sup>1)</sup>。テキスト整理の重要性を説く先行研究として張玉来 1999<sup>2)</sup> および罗江文・赵锦华 2010<sup>3)</sup> が挙げられるが、これらに加えて《中国古籍善本書目》<sup>4)</sup> 《中国古籍善本総目》<sup>5)</sup>などを参考に、蘭茂本のテキストをまとめてみると、以下のようになる。

### a. 明雲南刻本 韻略易通不分卷 蘭茂撰

八行字数不等細黒口四周双辺 欠あり

…雲南省図書館蔵 【発表者未見】

### b. 高岐本<sup>6)</sup> 韻略易通二卷 蘭茂撰

十行十九字小字双行行字同白口四周单辺 蘭序有・凡例有

巻首に陽川高岐「韻略易通説」・巻末に高郵張守中「韻略易通後」

(嘉靖 32 (1553) 年)

…華東師範大学図書館蔵 (のち『続修四庫全書』影印)

- c. 宿度本<sup>7)</sup> 韻略易通二卷 蘭茂撰  
八行字数不等小字双行白口四周双辺 蘭序有・凡例有  
卷首に「東海宿度校梓」  
…所蔵不明 (のち『罕見韻書叢編』影印)
- d. 吳允中本 韻略易通二卷 蘭茂撰  
九行字数不等白口上卷廿七頁以前四周单辺廿八頁以下及下卷四周双辺  
…雲南省図書館蔵<sup>8)</sup> 【発表者未見】
- e. 宝旭齋本<sup>9)</sup> 韻略易通二卷 吳允中撰  
半頁九行四周单辺白口 蘭序無・凡例無  
卷首に吳允中「重刻韻略序」(万曆 37 (1609) 年)  
…中国科学院図書館蔵・日本広島大学図書館蔵
- f. 高挙本 韻略易通二卷 高挙輯  
七行字数不等小字双行白口四周双辺 蘭序無・凡例無  
『古今韻撮』(万曆 41 (1613) 年刊) 卷之六・七所収  
…北京文物局蔵・日本国会図書館蔵
- g. 集義堂本 韻略易通二卷 蘭茂撰  
九行二十字小字双行同白口四周单辺单魚尾 万曆間刊  
…中国国家図書館蔵 【発表者未見】
- h. 李棠馥本<sup>10)</sup> 韻略易通二卷 李棠馥校正  
半頁七行字数不等小字双行白口四周单辺 蘭序無・凡例有<sup>11)</sup>  
卷首に「晋泮漢清李棠馥叙」(康熙 2 (1663) 年)  
…所蔵不明 (広文書局影印)
- j. 科学院本 韻略易通二卷 蘭茂撰 康熙 4 (1665) 年刻本  
…中国社会科学院蔵 【発表者未見】
- i. 彭応瑞本 韻略易通二卷 清彭応瑞撰 稿本  
…上海図書館蔵 【発表者未見】

これら 10 種のテキストのうち、おそらく d と e は同一ではないかと思わ

れるが、明確ではない。また、a・g・j・iは未確認である。このように課題は残された状態ではあるが、現時点で比較できるテキストを検討することにより、確認できることがらを指摘しておく。

## 2. テキスト比較

具体的にそれぞれのテキストでどのような異同があるかを検討していくが、紙幅の関係上、今回は二例のみを挙げる。

まずは一例として、凡例にある「早梅詩」の風母に着目する。風母の帰納助紐字として、高岐本では「分」「番」が書かれているが(図Ⅰ参照)、宿度本では「番」を「翻」字に改めている(図Ⅱ参照)。「番」には複数の音が認められ、『広韻』にも「附袁切」「孚袁切」「普官切」「博禾切」「補過切」の五例の反切が収められる。現代音でも fān と pān の二音が確認される。おそらく近世音においても複数の発音があったと考えて間違いはなかろう。帰納助紐字としては複数音を有する文字が使用されることは好ましくはない。そこで宿度本では「翻」にかえられたと考えられる。ところが「早梅詩」に付された帰納助紐字の部分は「翻」字に改めたにもかかわらず、「凡例」の後半部に記された帰納助紐字を使って発音を理解する文章部分では、うっかり「番」のまま残している<sup>12)</sup>(図Ⅲ・Ⅳ参照<sup>13)</sup>)。

ところが李棠馥本では全く高岐本と同じ文字になっており、改められることはない。このことから、高岐本→宿度本→高挙本と改編されたルートと、高岐本→李棠馥本へとそのまま受け継がれたルートの二類の伝播状況があったのかもしれないと推測される。

もう一例は、宿度本の中に収められないいくつかの常用字に注目したい。高岐本の西微韻・春母・陽平声にある「墀」「遲」「馳」「坻」「持」「簾」「治」の七文字が宿度本には無い。宝旭齋本・高挙本・李棠馥本にも収められない。「遲」「馳」「持」「治」など常用字の範疇に入るとされる文字が無いのは不可解である。それゆえであろうか、にわかには判断しがたいが、李棠馥本では西微韻・春母・陰平声に「遲」を、また春母の最末尾に明らかに

早梅詩		凡二十字每字下註翻切	
東	丁顛	風	分番破
向	欣軒	暖	寧年一
冰	賓邊	雪	新先
		無	文晚
		人	仁然
		見	京堅
		早	精箋
		梅	民綿
		早	平偏
		破	因言
		枝	真占
		關	輕牽

図Ⅰ 婦納助紐字「番」(高岐本)

早梅詩		凡二十字每字下註翻切	
東	丁顛	風	分翻
向	欣軒	暖	寧年一
冰	賓邊	雪	新先
		無	文晚
		人	仁然
		見	京堅
		早	精箋
		梅	民綿
		早	平偏
		破	因言
		枝	真占
		關	輕牽
春	陳纏	從	清千
		天	汀田
		上	申禪
		來	零連

図Ⅱ 婦納助紐字「翻」(宿度本)

又如江陽韻以風字爲母以陽字爲子曰風陽切  
 即叶之曰風陽風分番房乃是房字仍以房字  
 平上去入調之房紡放縛四字全矣餘皆準此

図Ⅲ 婦納助紐字の説明「番」(高岐本)

如江陽韻以風字爲母以陽字爲子曰風陽切即  
 叶之曰風陽風分番房乃是房字仍以房字平上  
 去入調之房紡放縛四字全矣餘皆準此

図Ⅳ 婦納助紐字の説明「番」(宿度本)



が、おそらく高岐本→宿度本→宝旭齋本への伝承ルートがあり、それとはまた別に李棠馥本が編まれるに至ったルートがあると仮定できるのではないかと、いまのところは考えている。

### 3. 比較からわかる可能性

ここでやや視点をかえて、蘭茂本が山東で歓迎され何度も刊行されるに至った経緯について、考察してみる。

これまでもっとも有力視されてきたのは趙蔭棠の説<sup>15)</sup>、すなわち王驥が北方へ持ち帰ったとするものである<sup>16)</sup>。しかし、高岐「韻略易通説」ならびに張守中「韻略易通後」を見れば明らかなように、高岐が藍本（太史洞野公の所有していたテキスト）を雲南から江蘇高郵へ持ち込み、刊行したことに疑いを入れない。高郵から山東へもたらされた詳細は分からないが、上記2で検討したことから、もし高岐本→宿度本→宝旭齋本への伝承ルートを結ぶことができれば、王驥が伝えたとするよりも、現実味を帯びる。つまり、蘭茂本は王驥により雲南からダイレクトに山東へもたらされたのではなく、陽川（雲南大理）の高岐が高郵への赴任とともに蘭茂本を持ち込み、高郵の張守中の協力を得て出版し、それが今度は東萊（山東掖県）の宿度の目にとまり再び上梓された。さらに呉允中（山東）の校訂を経て版を重ねられ、これを古淄（山東淄博）の高拳が編著『古今韻撮』に組み込み刊行した。そしてそれが結果として東萊（山東掖県）の畢拱辰により改訂され『韻略匯通』に生まれ変わったのではなからうか。

むしろ『韻略易通』がこのように北方で普及した背景は当時の言語状況と無関係ではない。北方官話の音系と方言との関係、また、韻書の利用方法などを複合的にとらえたうえで、今後さらに検討していく必要がある。

#### 註

- 1) 本研究発表では蘭茂本のみを対象とし、本悟本は含まない。
- 2) 张玉来《韻略易通研究》天津古籍出版社1999年
- 3) 罗江文・赵锦华「《韻略易通》版本考辨」《楚雄师范学院学报》第25卷第2期

2010年2月)

- 4) 上海古籍出版社 1985年
- 5) 翁連溪編校 線装書局 2005年
- 6) 高岐の「韻略易通説」に「予得之太史洞野公，携之久矣」とあることから、高岐本はもともと太史洞野公（未詳）が所有していたテキストということになる。
- 7) 宿度，字元周，掖県の人。嘉靖 38（1559）年進士（『明詩紀事』己籤卷十三による）。
- 8) 『四庫全書存目叢書』影印本はこの雲南省図書館蔵本を複写したものであるが、半頁九行字数不等白口上卷廿八頁以前四周单边廿九頁以下及下卷四周双辺であり、また卷首に東魯吳允中「重刻韻略序」（万曆 37（1609）年）も収め、吳允中本と書誌情報が酷似しているが、双辺となる頁が一葉異なる。蘭序無・凡例無。
- 9) こちらもまた半頁九行字数不等白口上卷廿八頁以前四周单边廿九頁以下及下卷四周双辺で、卷首に吳允中序もあり、『四庫全書存目叢書』所収本と酷似しているが、四庫全書存目叢書本は手抄による補欠の痕跡が認められる。
- 10) 叙に「但舊本爲吾泮趙君偉自建寧梓行，繇正徳庚辰（1520年），沿今百五十餘年，…（以下略）」と記し、この書が趙君偉本（未詳）を藍本とすることが解る。
- 11) このテキストには凡例に増加部分あり。
- 12) 高挙本では「早梅詩」・凡例の説明文ともに「翻」字とし、齟齬を無くしている。
- 13) 図中のいびつな□や◎による囲い字は発表者によるマーキング。
- 14) 手書きの囲い字○は、明示するために発表者がつけた。
- 15) 趙蔭棠『中原音韻研究』新文豊出版（中華民國 73（1984）年 2月影印）
- 16) 李澄中「蘭隱君祠堂記」の記述にもとづく。

（本学准教授 中国語学）

〈キーワード〉音韻学，近代漢語，版本整理

#### 〔編集委員会付記〕

浦山あゆみ准教授の他の発表者及び発表題目は次のとおりである。

近世京都と東本願寺の造営

平野寿則本学准教授

中山間地における生活問題と地域福祉——奈良県川上村を中心に

志藤修史本学准教授

大谷大学の人権教育に関する私論

谷 眞理本学教授

以上の発表内容は『大谷学報』第 91 巻第 1 号に論文として掲載予定である。